



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2015/11/12(木)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 173

『第45回全国中学校バスケットボール大会(女子)を観戦して』

札幌市立清田中学校 高橋和也

8月22日(土)から岩手県一関市・奥州市で開催された標記の大会に、私は日本中学生連盟北海道ブロック長の立場で参加しました。そのため、U15強化委員会や日本中体連との合同会議等、複数の会議に出なければなりません。さらに全中はU15の選手選考も兼ねているため、コート割当が課せられます。4面に渡って試合が同時進行すれば、自分の割当コートから離れて他のコートの試合を観ることができません。そういう面を差し引いていただいて、全ての試合を観てはいませんが可能な限りの報告とさせていただきます。

1. 全中をとりまく空気感

全中と言えば「うだるような暑さ」。ここ数年間は試合会場となる体育館こそ必ず冷房が利いていますが、一歩外に出ればそこはもう…。地球温暖化で北海道も暑くなったとは言え、真夏の道外に一歩も出たことのない道産子にとっては、想像を絶する暑さが待っています。学校からの遠征補助があまり出ないため、公共交通機関を利用して大会会場に向かおうとしたチームの1年生部員がバス停であまりの暑さに倒れる… というのは昔よくあった光景です。

しかし、今回は東北ブロックの岩手県開催ということもあり、さほど暑さは気にならず、屋内も屋外も実に快適な環境でした。ただ、会場の雰囲気はいつもながらハンパではありません。試合会場周辺にたくさん掲げられている「全国中学バスケットボール大会」の幟を見ると、誰もが「全中に来たな！」とテンションが上がります。そして、応援席の喧嘩上等でも言うかのような血気盛んな声援は、北海道では体感できるレベルのものではありません。特に女子は男子と違って、大学を経てからトップリーグに行くという流れではなく、高校から即トップリーグという現状ですから「この大会で一旗掲げて名門高校へ！そしてトップリーグの選手になる！」というギラギラした雰囲気が親からも子からもひしひしと伝わってきます。

そういう意味では北海道はいい意味で上品。悪い意味ではあっさりし過ぎていると考えられます。地域性というものがあるので、北海道は北海道の雰囲気があってよいでしょう。

ただし、気をつけねばならないことは全中でも「自分たちらしさ」を出すこと。「よそ行き」にならないこと。そして、相手の雰囲気に圧倒されないこと、飲まれないことです。その点にも注目して、本道代表の東月寒中と新川中の試合を見ました。

なお、こういったことを鑑みて「いつかは自分も全中に！」と考えている人は身銭を切って全中会場に向かうべきと考えます。「百聞は一見にしかず」。多くの学びがそこにはあるのですから。

2. 日本一との距離

かつて北海道代表女子が全国の舞台において苦戦が続いていたため、北海道ジュニア連盟としても女子強化策をいくつか打ち出したことがあります。確かにその頃は全国のトップクラスのチームに大きく水をあけられている感がありました。

しかし、今大会を観ていると、北海道代表が勝てそうなチームがかなり増えたと感じました。全中出場チームの中で勝てるチームを探すのが大変だった頃のことを思うと、万感の思いがこみあげて来ます。口さがない先生は「全中のレベルが落ちた。」と言いますが、私はそう思いません。むしろ、北海道のレベルが上がったと言って良いでしょう。道内で日々悪戦苦闘して指導にあたっているコーチには朗報です。

具体的に日本一との比較を行うと、今大会の優勝チームである所沢山口のスターティングラインナップの身長は164 cm、166 cm、168 cm、173 cm、162 cm（平均166.6 cm）です。手も足も出ない高さではありません。実際、本道代表の東月寒中は162 cm、157 cm、162 cm、157 cm、176 cm（平均162.8 cm）。新川中は154 cm、169 cm、171 cm、156 cm、168 cm（平均163.6 cm）ですから、サイズにおいてはそれほど引けを取っておらず、局面的には優位になっているところさえあります。

では、所沢山口が日本一となった勝因は何か。既にいくつかのバスケットボール専門誌において分析がなされていますが、私がライブで観た感覚としては選手個々のバスケットボールI・Qの高さに加えたファンダメンタルの徹底が日本一の最大の要因であると考えます。どんなに緊迫した試合でも、あるいは大差が付いて緊張感に欠けてしまいがちな試合でも、ミスの少ない安定した試合運びを常に展開していました。

特筆すべきはオフェンスリバウンド。さほど大きくない所沢山口でしたが、全中出場チームの中でもその強さは群を抜いていました。思い起こせば2年前の浜松全中で、清田中も所沢山口と対戦しました。その時の清田は栗林(184 cm)、藤原(174 cm)とサイズに恵まれていましたが、やはり所沢山口にオフェンスリバウンドを奪われている間に主導権を奪われて敗退した苦い思い出が脳裏に甦りました。今大会でもジュニアオールスターのM・V・P、東京オリンピック日本代表間違いなしと言われている逸材の奥山選手(180 cm)を擁する坂本中との準決勝でも、リバウンド争いで互角以上の戦いを見せていました。

山の手高校の上島コーチが常々「勝つためにはディフェンス。チャンピオンになるためにはリバウンドとルーズボール」と言われますが、正しくそれを体現したチームでした。

埼玉の関係者の話によると、所沢山口の強さは決して能力だけのものではなく、猛練習によって培われたものであるとのこと。時には夜11時まで練習しているという話も聞きました。もっとも昨年の香川全中で日本一になった折尾中も、九州ブロック大会で二島中に負けた翌日に14時間練習したという話もあります。全中で優勝するようなチームにはあたかも都市伝説のような猛練習のエピソードが数多くあるものです。

では、それと比較して北海道代表の東月寒と新川は全中においてどうであったかというところ、サイズ同様、決してひけをとる戦い振りではありませんでした。北海道2校が予選リーグを両方1位で通過したのは恐らく初のことではないでしょうか。組み合わせに恵まれたとしても、そのチャンスをモノにできるのは本当の実力をもったチームにしかできません。

2校とも北海道代表の名に恥じない試合をしてくれたと考えます。ただ、願わくは多くの道民が期待したように、決勝トーナメントでも逆ヤマに有力校が固まったので、北海道勢同士の準決勝が観たかった…と思います。

新川は決勝トーナメント1回戦の日章学園戦で、やや「よそ行き」の試合になってしまったのが残念でした。あれよあれよという間に思わぬ大差をつけられ、そこから追いつけるも間に合わなかったという試合でした。選手も監督も「こんなはずではなかった…」という気持ちでしょう。しかし、それが全中という舞台なのです。

東月寒は平成8年三重全中での手稲東以来の決勝進出ができたように思います。キャ

プテン阿部とPG大原を中心に高いシュート力とスピード、それに岡本のインサイドで山陽(長野)、北谷(沖縄)、大島(茨城)を危なげなく退けました。ただ、予選リーグの北谷戦で玄人受けするロールプレイヤーである平塚が負傷してしまったのが誤算と言えます。流れるようなパスワークからのシュートといったオフェンスリズムに狂いが生じたのが残念でした。この辺りも全中の怖さと言えます。勝つためには頑丈な身体とけが見舞われない運というの必要なのでしょう。

ただ、延長戦で敗れた準々決勝はチーム力が100%ではなかったにしても、再三突き放すチャンスがあったと思われます。しかし、愛知県代表長良中の醸し出す独特の雰囲気と迫力にやや飲まれた感がありました。

このようにアンラッキーや自分達のパフォーマンスを出し切れなかったことだけが本道勢の敗因かという、そうではありません。道外強豪チームが見せる「あたかも己の生き様を相手にぶつけていくかのような迫力」が北海道チームにはまだ足りないと言えます。

東月寒も新川も勝機は十分にはありましたが、あと一步のところまで勝利を逃してしまった最大の要因はこの「チームを押し上げる強さ」が不足していたことです。サイズや体力、技術において、北海道と日本一との距離は間違いなくつまってきています。ジグゾーパズルで言うなら、ほとんど完成に近づいていると言って良いでしょう。

しかし、残った最後のワンピース。これこそが最も手に入れにくいものなのかもしれません。

3. 来年の全中に向けて～ これからのチーム作りにおいて

JBAがFIBAから制裁を受けた関係で「来年4月から中学生はゾーン禁止」の到達しが回っています。これからのチーム作りにおいて、これをチャンスととらえるかどうかは指導者の考え方1つです。現在、マンツーマンの細部に至る定義で意見が揺れています。全中の舞台でベタゾーンをやるチームなどないことを考えれば、日本一に向けての第一歩としてマンツーマン・ディフェンスに誠実に向き合うことは大切でしょう。その上で「全国に通用する1on1」「全国に通用する速攻」「全国に通用するディフェンス」を構築していくべきと考えます。

かつては北海道勢が勝てない理由を「陸続きでないこと」としていた意見が多くありましたが、今やJRよりも飛行機代が安くなり、道外遠征も「稀」ではなく「ちょっと特別」程度の状況となりました。また、山の手高校が三冠を取ったことから、北海道でも正しいバスケットボールをやろうと、正しく考え、正しく努力すれば勝つことは可能であることが実証されました。だからこそ、最後のワンピースである「チームを押し上げる強さ」を身につけるべく努力すべきだと考えます。

最後になりますが、今大会の活躍が認められて新川中⑤東藤、東月寒中⑧岡本がトップエンデバーに招集されました。エンデバースタッフの話では2人も全国の強者と互角以上に渡り合っていたとのこと。北海道のレベルは低くありません。過信はダメですが、自信をもって津軽海峡を越えて北海道に優勝旗を持って来られるように、道民一丸となって頑張っていきましょう。